

宗教は戦争の原因になりうるか？

星川 啓慈

大正大学教授

【梗概】よく「人類の歴史は戦争の歴史である」といわれる。とくに戦後、イラン革命や湾岸戦争、9.11米国同時多発テロ事件の映像的影響もあってか、「宗教が戦争の原因だ」と論ずる言説が少なからず見受けられる。しかしながら、哲学的な観点からは、そのテーゼそのものが矛盾をはらんだものであることが、過去のさまざまな知見の分析からは、そのように断定するのは難しいことがわかる。それでは宗教は戦争とどうかかわってきたのか、過去の文献をもとに考察し、誤って見られがちな宗教と戦争との関係を正確に把握しておきたい。

はじめに

これまでの人類の歴史を振り返ると、いつの時代にも戦争があった。J.バベルの推計では、記録が残っている人類史約5500年のうちで、世界が平和であった「いかなる戦いもなかった」のは、わずか292年ほどであったという（cf. Morgan, 2016, p.6）。1つの戦争の開戦時点と終戦時点の確定は困難であるから「292年」という数字は別としても、それほど人類は戦争をし続けてきたのであり、現在でも世界各地で武力衝突が頻発している。さらに、M.クレフェルトは「今後も戦争はなくなる」と論じている

（cf. クレフェルト, 2010, chap.6 and 13）。

ただ、S.ピンカーの大著『暴力の人類史』が説得的に示しているように、宗教が絡むか否かは別として、戦争によって命を奪われる人間の割合は、歴史の流れとともに減ってきていることは確かなようだ（cf. ピンカー, 2015）。

ところで、四半世紀以上も前になるが、日本の雑誌等に「宗教が戦争（紛争）の原因だ」という論調の記事が掲載されていると、その雑誌の売り上げが伸びると聞いたことがある。なるほど日本人は、そのような考え方を好む傾向があるようにもみえる。

それを反映してか、日本では、インターネット上で「ほとんどの戦争の原因は宗教なのではないか？」「宗教があるから戦争が起こるのではないのですか。」「宗教戦争の起こる原因は何か？」「宗教戦争の原因ってなんですか？」といった問いが出され、それらに対して種々の答えがあげられている。本稿のタイトルも、読者の目を引くために、「宗教は戦争の原因になりうるか？」としている。

実は、こうした事情は欧米でも同じである。

“Does religion cause war?” “Is religion

■ほしかわ・けいじ

愛媛県生まれ。1980年筑波大学卒、84年同大学院哲学・思想研究科博士課程単位取得退学。その後、英国スターリング大学客員研究員、図書館情報大学助教授、大正大学助教授等を経て、2000年同大学文学部教授、現在に至る。博士（文学）。専門は宗教哲学。主な著書に『ウイトゲンシュタインと宗教哲学 言語・宗教・コミットメント』『悟りの現象学』『対話する宗教戦争から平和へ』『宗教哲学論考 ウイトゲンシュタイン・脳科学・シュツツ』ほか、共編著書など多数。

the primary cause of war?” “Is religion the cause of most wars?” “Religions as a cause of war”といったサイトがずらりと並んでいて、宗教が戦争の原因か否かをめぐって多くの人々が論じているのである。

以上のようなサイトを含めて、種々の媒体において、「宗教が戦争の原因である」といわれることもあるし、「宗教は戦争に利用されているだけで、その原因ではない」ともいわれることがある。2つの立場は拮抗しているように見える。どちらがより真実に近いのだろうか。

しかし、翻って考えてみると、そもそも「宗教が戦争の原因であるか否か」という問いには決着をつけることができるのだろうか。以下では、「宗教は戦争の原因（それも単一の原因）になりうるか否か」をめぐって、いろいろと思いをはせてみたい。

なお、引用文を尊重したため、「イスラム教」と「イスラーム」という表記が混在することをお断りしておく。

1. 「戦争の原因」について

マッチを擦れば（原因）火がつく（結果）わけだが、それらは因果関係として（直感的に）認識できる。しかし、その二者間の因果関係をさらに詳しく説明しようとする、マッチを擦れば摩擦熱が発生し、摩擦熱によって火薬に火がつくなど、多くのプロセスが想定され、それらのプロセスの因果関係も説明しなければならなくなる。つまり、それらの無数ともいえるプロセスの因果関係をすべて確定しなければならないことになる。これは不可能であろう。実は、「マッチを擦ったら火がついた」という単純な事例でも、その因果関係を厳密に分析することは非常に難しい作業なのである。ましてや、複雑極まりない大規模な社会現象である戦争の因果関係を厳密に取り出すなどということは、不可能であるとい

わざるをえない。

その意味で、「宗教は戦争の原因か」という種類の問題の立て方は、読者の注意を引くという目的の場合には許容できるが、厳密には答えることができない問題設定といえる。

さらに、言葉の問題もある。「原因」という言葉は、それを聞いた人すべてに同じように理解されるのであろうか。スガナミの『戦争の原因』では、「戦争の原因」という場合、その「原因」の理解が複数の意味で受け取られることが多いという。それは大きく3つの形で解釈される（cf. 石川, 2017, p.50）。①戦争が起きるにはどのような条件が必要か（戦争の必要条件）、②戦争はどのような状況で起きやすいのか（戦争の相互連関）、③それぞれの戦争はどのように生じてきたか（特定の戦争が生じる際の出来事の順序）。人は、「戦争の原因」という成句を耳にしたとき、必ずしも同じものをイメージするのではないのである。

そうすると、「戦争の原因」を究明しようとするとき、「戦争の原因」そのもののみならず、「戦争の原因とは何か」ということのコンセンサスを形成しなければならないが、これも難しいだろう。

哲学者のウィトゲンシュタインは「いやしくも問いを立てることができるのなら、その問いに答えることもできるのである」（『論理哲学論考』6.5）と述べた。上記の2つの事柄から判断しても、「戦争の原因は何か」という問いそのものが成立するか否かもおぼつかないのである。すなわち、問いを立てられないのだから、当然、それに答えようもないのだ。

2. 「宗教戦争原因論」は成立しない

石川明人は、近著『私たち、戦争人間について』において、宗教と戦争の因果関係をめぐって議論を展開している。これを手引きに、これ

まで「何が戦争の原因といわれてきたか」を振り返ろう (cf. 石川, 2017, pp.38-40)。

紀元前5世紀に、トゥーキュディデースは、①利益、②恐怖、③名誉を、戦争の原因としてあげたと伝えられている。同じく、紀元前に書かれた中国の『呉子』のなかでは、①名誉欲、②利益、③憎悪、④内乱、⑤飢餓の5つが、戦争の原因としてあげられている。時代が下って、ホッブズは、①競争、②不信、③自負を、争いの主要な原因としてあげている。

19世紀初頭には、ジョミニが『戦争概論』を著わし、政府が戦争を行なうのは以下の6つによるとした。①ある種の権利を回復し、あるいはこれを守るため、②国家の重大利益 (商、工、農) を防護し、維持するため、③勢力の均衡を保つため、④政治・宗教上の主義、信条を広め、相手側のそれを打破し、わが方のそれを守るため、⑤領土の拡大により、国威、国力を増進するため、⑥征服欲を満足させるため。

石津朋之は『戦争学原論』において、「3つのG」を戦争の原因としている。①金 (Gold) = 利益、②神 (God) = 宗教に限らない広義の価値観や世界観、③名誉 (Glory) = プライドなどの心理。

石川が紹介している人物・著書ですべての「戦争の原因」が尽くされているわけではないが、筆者には興味深く感じられることがある。それは、トゥーキュディデースも、『呉子』も、ホッブズも、明確に独立項として「宗教」を戦争の原因にあげていないことだ。もちろん、現代の「宗教」概念の成立は (西欧の) 18世紀を待たねばならないのだから、ここに出てこなくても不思議はない。しかし、「宗教に相当するもの」が戦争の原因にあげられていないことは事実であろう。

ジョミニは「政治・宗教上の主義、信条」を指摘しているが、「宗教」を独立したものとはして

いない。石津も「神」を戦争の原因の一つにあげているが、それが「宗教に限らない広義の価値観や世界観」だとしている。

そうすると、古代から現代にいたるまで、戦争の単一の原因として宗教はそれほど重視されてこなかったといえる。いいかえれば、明確な独立項としての「宗教」が戦争の単一の原因か否かという議論や問題意識が出てきたのは、きわめて最近のことであり、変わった問題の立て方である、といわねばならないだろう。

もちろん、十字軍や三十年戦争など、一般に典型的な「宗教戦争」と目されるものもいろいろとあったが、それらをめぐる原因を追究すれば、独立項としての「宗教」以外の上記のさまざまな事柄 (利益、憎悪、競争心、権利の回復、領土の拡大など) も必要となる。

また、「何をもって、宗教を戦争の単一の原因であるとするのか」も定かではない。すなわち、「宗教がある戦争の単一の原因である」ことは確定できないのだ。かりに、ある宗教の聖典／経典に「他宗教に攻撃をしかけよ」と書かれていても、その宗教が常にそうした態度を他宗教に対してとるわけではない。そうであれば、聖典／経典にある「他宗教に攻撃をしかけよ」という言葉が戦争の単一の原因とはいえないであろう。これを実行に移す際、種々の条件 (それ相当の兵力・武器・兵站など (←スガナミの①)) に加えて、他の動機 (領土拡大の欲望、征服欲の満足、他宗教に対する憎悪、自己防衛の心理など) も存在することが多いに違いない。

さらに、次のようなこともいえる。現在の日本には宗教戦争は生じていない。異なる宗教集団による暴力的な衝突はほとんど起こっていない。宗教学者の中には「日本では諸宗教の共生がうまくいっている」という研究者もいる。石川は、こうした事実を踏まえながら、「単純に〈宗教＝戦争の原因〉だと主張するならば、異なる

宗教が戦争をしていない時、なぜ彼らは戦争をしないでいられるかを説明せねばならなくなるだろう」と提言している(石川, 2017, p.67)。

以上のように見てくると、宗教を戦争の単一の原因であるとする「宗教戦争原因論」とでも呼ぶべきものは、成立しなくなるのではなかろうか。

それゆえ、「宗教は戦争の原因か否か」という質問には、二者択一的にどちらかの見解を選ぶよりも、「宗教が戦争の直接原因になることはほとんどないが、宗教と多くの戦争との間には密接な関連がある」と答えるべきであろう。また、筆者をふくめたほとんどすべての宗教学者は(宗教が戦争の原因であると断定はできないが)「宗教には戦争を推し進める側面がある」

「宗教は戦争に宗教的意味づけを与える」という事実を肯定している——これについては、第4節で詳しく論じたい。

3. 宗教は戦争の原因ではないとする諸見解

第2節で、宗教を戦争の単一の原因だとする「宗教戦争原因論」は成立しない、と論じた。それでは、反対に、「宗教は戦争の原因ではない」といえるのだろうか。まず、そのように主張する陣営に属する研究者の見解に目をむけよう。

宗教と戦争の関わりをめぐる統計的事実には、次のようなものがある。『諸戦争百科事典』によれば、紀元前3500年から現在まで、1763の主たる武力衝突(戦争・反乱・革命)のうち、わずか123(7%以下)のみが「宗教的原因を含んでいる」ものとして分類されているにすぎない。同様に、『戦争百科事典』では、そこで取り上げられた全戦争のうち、わずか6%のみが「宗教戦争」というレッテルを貼られているにすぎない(cf. Morgan, 2016, p.4)。2つの主張に従えば、宗教が戦争の原因になるのは、全戦争のうちの6~7%のみである、ということになる。

2013年に起こった戦争のすべてを調査した「経済と平和のための研究所」は「今日において、宗教は衝突の主たる原因ではない」と結論づけている。また、2013年における35の武装した衝突のうち、14の衝突(40%)においては、宗教的要素はいかなる役割も果たさなかったという。その報告書は「いかなる衝突においても、宗教は単一の原因でなかったことは、注目すべきことである」と論じている。さらに続けられ、M.ピアースも「大部分の戦争は宗教的原因をほとんど持っていないか、まったく持っていない」と明言している(cf. Morgan, 2016, pp.4-5)。

テロリズムと宗教との結びつきに関していえば、例えば、1980年から2009年までの世界各地の自爆テロに関与した460人のテロリストの履歴・社会的背景・信条などをデータベース化して研究した、R.ペイプ博士は「宗教が自爆テロの根本原因ではなく、ほとんどの自爆テロに共通するのは、世俗的な政治目的の存在であり、宗教はあくまでも〈道具〉として使われているにすぎない」(下線引用者、小川忠, 2018, p.4)と結論づけている。

以上の議論を要約すると、宗教の信者や宗教に好意的な態度をとる多くの研究者たちの見解は、下線部と同様に、「宗教は戦争の原因ではない」「宗教が平和実現のための〈障害〉になっているわけではない」「宗教は戦争の原因ではなく、政治的・戦略的に利用されているにすぎない」というものであろう。

4. 宗教と戦争との密接な関係

しかしながら、なかなか第3節の最後のように断言できないのではないかな。

G.ブートゥールたちの『戦争の社会学』によれば、1740年から1974年の間における366の戦争や武力衝突によって、多くの人命が失われたのだが、そのうちの56%には宗教対立があっ

たとえられる (cf. ブートウール&キャレール, 1983, p.47)。

古くは紀元前1世紀に、ルクレティウスは「〔近代的な意味ではないが〕宗教は多くの悪を扇動する」と述べたそう。現代においては、M.ユルゲンスマイヤーが『グローバル時代の宗教とテロリズム』などで宗教と戦争との密接な関係を強調しており、彼は一貫して「宗教と暴力の暗い結びつき」(“the dark alliance between religion and violence”)を論じている。つまり、宗教には血なまぐさい側面がある事実を強調しているのだ。

ユルゲンスマイヤー以外にも、同様の主張をする研究者はかなりいる。E.ジョンは「宗教は人々を憎むべきレミング〔鼠の一種〕の集団に変えてしまう」と述べ、「私は宗教を〔信じることを〕完全に禁止したい気がする」と付け加えている。S.ハリスは、信仰と宗教を「われわれの歴史における最も大きな暴力の源泉」としながら、「見るべき眼をもったあらゆる人々にとって、疑いなく、宗教の信仰は人間の衝突の永遠の源泉であり続ける」と述べている (cf. Morgan, 2016, p.3)。いいかえれば、「宗教がなければこの世はもっと平和になるだろう」というわけだ。このように、多くの学者たちが暴力や戦争と宗教との密接な関係を強調している。こうした考え方は、宗教を信じない者や宗教を肯定的に捉えない研究者に多くみられるようである。

また、S.ハンチントン『文明の衝突』において、異なる宗教の信者が参加した戦争の場合、その戦争においては憎しみの度合いが増幅し、時間的にも長引く傾向があると論じた。彼はそのような戦争を「フォルト・ライン戦争」(異なる宗教を根幹とした異なる文明が接する「断層線」上で勃発する戦争)と呼んだ。そして、「フォルト・ライン戦争は異なる神を信ずる人々の間で起こる」とか「フォルト・ライン戦争が頻発し、

烈しくて、暴力的なのは、異なる神を信じることが原因であることが多い」などと述べている。さらに、ハンチントンは「数千年にわたる人間の歴史は、宗教が〈わずかな相違〉などではなく、おそらく人間のあいだに存在しうるもっとも深刻な相違かもしれない」とも語っている (cf. ハンチントン, 1998, chap.10 and 11.)。

ちなみに、日米間の太平洋戦争の場合、戦争が終結した後、すぐさま日本は米国の友好国・同盟国となった。これはフォルト・ライン戦争ではなかったのである。

ユルゲンスマイヤーの「コスモス戦争」もハンチントンの「フォルト・ライン戦争」と共通点をもっているといえよう。ほとんどの宗教は「意味の秩序体系」(コスモス)をもっているが、宗教がもつこうした意味の秩序体系の確立・保持のために、善と悪、真理と虚偽、秩序と無秩序といった絶対的な二項対立をめぐる戦われる戦争が「コスモス戦争」である。争いが、世俗的なものであっても、当事者の命ばかりではなく宗教文化全体を護るためのものだと思われれば、それは宗教的意味合いをともし文化戦争とみなされる。そして、その争いは人間の歴史を超えた次元で起きていると解釈される。さらに、その争いにこの世では勝利できなくなったとしても、つまり、人間の次元では絶望的な状況になったとしても、その争いは勝利を神に委ねる宗教の次元で再考される。一言でいえば、世俗的な争いも、成り行きしだい、宗教的な意味を帯びるのである (cf. ユルゲンスマイヤー, 2003, chap.8)。

ところで、クレフェルトは『戦争の変遷』において、戦争の将来を予測する考察の中で以下のように論じている。

…今日の視点からすると、どう見ても宗教思想・宗教的信念・狂信は武力衝突の動機のなか

で、少なくとも西洋において過去300年にわたって果たしてきたよりも大きな役割を果たしそうだ。…世界で急成長を遂げている宗教はイスラム教である。イスラム教が広まっている理由はいろいろあるだろうが、その好戦性も1つの要因であるといってもそれほど馬鹿げてはいないだろう。…世界各地で多くの人が——先進諸国で虐げられている人々も含めて——イスラム教は戦う心構えのあるところが魅力的だと思っている。…

ある1つの宗教の好戦性が大きくなり続けるようなことがあると、他の宗教も好戦的にならざるを得ないだろう。人々は、自分たちの理念や生き方、肉体的命を守らざるを得なくなるだろう。そして、それは何か素晴らしい理念を掲げてしか達成できないだろう。だが、その理念はもともと世俗的なものであるとしても、それを掲げて戦っているうちにそれが宗教的な意味を帯び、宗教的情熱のようなものと結びつくようになる。したがって、近年のイスラム教の復活はキリスト教の神の復活を引き起こすかもしれない。そのときは、愛の神ではなく、戦いの神としての復活であろう (cf. クレフェルト, 2011 (原書1991), pp.351-352)。

これは1991年に出版された『戦争の変遷』の論述であるが、その後起こった9.11米国同時多発テロ、アルカーイダの活動、イスラム国の勃興——これらの背景は複雑であるが——などを思い浮かべると、論述の前半の予測は的中しているのではないか。もちろん、これらは一部の過激派が引き起こしたものであり、穏健なイスラム教徒はこの見解に反対するであろう。だが、クレフェルトの「イスラム教は戦う心構えのあるところが魅力的だと思っている」という主張は、不幸にも、間接的に証明されたといえなくもない。

また、論述の後半も、(日本の戦国時代の戦いも含めて) 世界のあらゆる時代や地域における戦争を研究してきたクレフェルトの予想であり、30年近くたった現在でも、重みをもっている。そう遠くない将来、イスラム教徒の数がキリスト教徒の数を上回るとすれば、このことも、彼の予言に何らかの影響を与えるかもしれない。いずれにしても、クレフェルトの見解は「戦争はなくなる」というものである。そして、「宗教思想・宗教的信念・狂信」は武力衝突の動機のなかで、今後はさらに「大きな役割を果たしそうだ」と予想しているのである。

5. 複雑に絡み合う戦争の原因群

第1節と第2節でみたように、宗教が戦争の単一の原因であることを実証することは不可能だし、第3節で紹介したように、「宗教は戦争の原因にはならない」という論者も多い。その一方で、第4節でみたように、「宗教は戦争と密接な関係を持っている」と主張する研究者も多い。

月並みな見解かもしれないが、以下でみるように、やはり「いろいろな要素・要因が複雑に絡まって戦争を引き起こしている」と見なすのが妥当ではないだろうか。当然、宗教も戦争を引き起こす要素・要因の1つである。

①戦争にはいろいろな要素・要因が複雑に絡まりあっている。

②宗教は戦争を引き起こす要素・要因の1つとなることがある。

③宗教は戦争を促したり戦争に宗教的意味づけしたりすることが頻繁にある。

③について敷衍すれば、宗教的意味づけがなされると、戦いは「人間同士の戦い」のレベルを超えて、「神同士／超越的なもの同士の戦い」の様相も呈してくるので、一層複雑化し、その後の和解も容易ではない。このことは、ハン

チントンの「フォルト・ライン戦争」やユルゲンスマイヤーの「コスモス戦争」の議論からも首肯できよう。

戦争には、社会のレベルでは、領土争い・民族的対立・政治的対立・経済的対立・イデオロギー的対立など、また個人のレベルでは、誇り・偏見・妬み・憎しみ・競争心・恐怖感・権力的欲望・物質的欲望・正義感・不公正感など、種々の事柄が絡んでいるだろう。

ピアースは先に「大部分の戦争は宗教的原因をほとんど持っていないか、まったく持っていない」と結論づけていたが、その一方で、彼は「人間の戦争を引き起こした2つの主要な原因は、実際のところ、文化と、領土・資源・権力に対する貪欲さである」とも論じている。つまり、「文化」と「貪欲さ」が戦争の原因であって、宗教は戦争の原因ではない、というわけだ。

しかしながら、ピアースは「文化や貪欲さはしばしば宗教という衣服を纏うので、文化のために戦われる戦争は、しばしば宗教のために戦われるように見える」とか、「宗教がその問題の原因と思われる多くの戦争は、精査の結果、その起源については曖昧であることが分かった。その理由は、宗教はしばしば、ナショナリズム、人間の貪欲さ、その他の世俗的動機にとって道徳的に便利な外套として、これまで使われてきたし、現在も使われているからである」とも論じている (cf. Morgan, 2016, pp.5-6)。

ピアースは、宗教を戦争の原因とみなさないとしても、「衣服」とか「外套」というメタファーを使って、宗教と戦争の関係を論じているのだが、筆者にいわせれば、いずれの表現も、③の「宗教による戦争の促進や戦争の意味づけ」と深い関係にあるか、その別の表現である。そして、その「衣服」や「外套」(＝宗教)の下には、彼自身が明言しているように、「領土・資源・権力に対する貪欲さ」「ナショナリズム、人

間の貪欲さ、その他の世俗的動機」など(戦争を引き起こす複数の要素・要因)が着込まれているのである。だとすれば、宗教戦争原因論を否定するピアースですらも、少なくとも上記の①③を容認していることになる。

おわりに

もう「何が戦争の原因か」「宗教が戦争の原因であるか否か」という類の不毛な論争や問いの立て方はやめるべきではないか。そして、「種々の要素・要因がいろいろと結びつきながら、戦争を引き起こしている」「宗教は戦争の単一の原因とはいえないが、戦争を引き起こす要素・要因の1つである」「宗教には戦争に宗教的意味づけをし、戦争を(場合によれば激烈に)促進させる側面がある」と解釈すべきであろう——すでに多くの人々がこのように考えているだろうが。

しかしながら、これで話が終わるわけではない。そのように考える場合でも、多くの問題が生じてくるのだ。例えば次のようなものである。①1つの戦争の要素・要因となる要素はいくつあるか、どのような組み合わせになるかなどは、個々の戦争によって異なる。②個々の要素・要因の追究は因果の連鎖の場合のように無限背進に陥る恐れがある(どこで要素・要因の追究を中止するかは判断が難しい)。③大規模な戦争では、戦争にいたるプロセスや背景についてかなり詳細に調べがついていても、どれがその重要な要素・要因なのかを確定することは困難である。④敵／味方などの立場によって、要素・要因をめぐる解釈の違いが生じる。⑤時間の経過にともない、新資料が発見されるなどして、要素・要因をめぐる解釈が変化する。こうした種々の問題が生じてくるであろう。

そうすると、「何が戦争の原因か」「宗教は戦争の原因か否か」といった類の問題設定は、ほ

とんどすべての人々が認める解答が存在しないものだ、ということにならざるをえないのではありませんか。すなわち、ウィトゲンシュタイン流にいうならば、しょせん、これらの問いは、問いそのものとして成立しないのだから、答えることもできないのである。逆にいうと、答えがないから、これらの問いは立てられないのだ。

(2018年5月30日)

<参考文献：著者名のアルファベット順>

- 1) ブートウール, G. & キャレール, R. 『戦争の社会学——戦争と革命の二世紀1740-1974』中央大学出版部, 1980年。
- 2) クレフェルト, M.v. 『戦争文化論(上下)』原書房, 2010年。
- 3) クレフェルト, M.v. 『戦争の変遷』原書房, 2011年。
- 4) 星川啓慈ほか『神々の和解——21世紀の宗教間対話』春秋社, 2000年。
- 5) 星川啓慈『対話する宗教——戦争から平和へ』大正大学出版会, 2006年。
- 6) 星川啓慈・石川明人『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?——私たちの戦争と宗教』並木書房, 2014年。
- 7) ハンチントン, S. 『文明の衝突』集英社, 1998年。
- 8) 石川明人『私たち, 戦争人間について——愛と平和主義の限界に関する考察』創元社, 2017年。
- 9) ユルゲンスマイヤー, M. 『グローバル時代の宗教とテロリズム——いま, なぜ神の名で人の命が奪われるのか』明石書店, 2003年。
- 10) Morgan, R. “Does religion cause war?” in : *Inside Life*, issue 24, 2016.
- 11) 小川忠「自爆テロはなぜ頻発するのか——イスラーム原理主義との関連から」『世界平和研究』216号, 2018年。
- 12) ピンカー, S. 『暴力の人類史(上下)』青土社, 2015年。